

「何をしているのだろう。」

目をこらしてみると、老人は岩にむかつて、のみをふるっているのです。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。

人のためじゃ、みなのためじゃ。

みなのために、道をつける。

道があれば、みなが喜ぶ。

なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」

老人の衣は土でよごれていました。ひざから下は泥どろの中にうまってしまい、どび散る小石のかけらをうけて、むき出しの腕や顔には、べつとりと血がにじんでいました。

突然、老人のからだに光に照らし出されたかと思うと、神々しいばかりに輝

